建設ぶらり旅

津田永忠と社倉米

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

岡山は晴れの国だというが、あいにくの小雨模様となった。水たまりを避けながら、後楽園の正門をくぐり、左側にある松林の中の小道をいくらか進むと、目的の津田永忠遺績碑があった。碑が濡れると、刻まれた文字が読みにくくなるが、なんとかなりそうだ。それに書き下し文が書かれた看板が建てられていたので、読みにくい部分を照らし合わせることができる。

ところで、津田永忠とは誰かと問われて、どのくらいの方が答えられるだろう。地元岡山でも少ないかもしれない。この碑が建てられた訳も、その功績に比べて彼の名が、あまりにも知られていなかったからだ。これから、その足跡を追っていくが、手始めがここ後楽園となる。

その前に大雑把だが津田永忠の人物紹介をすると、彼は岡山藩初代藩主池田光政と二代綱政の二君に仕えた能吏だった。主君である光政をして「彼者は、使ひ様悪敷ば国に禍をなすべし、才は国中に双びなし」と言わしめるほどの人物だった。実は、光政が隠居した際に永忠も一度政治の中枢から退けられているのだが、研究者である柴田一（はじめ）氏は、息子の綱政では永忠を使いこなせないと光政が危惧したためと推測している。しかし、阿呆あつかいされた綱政の時代にこそ、永忠はその実力を発揮した。

後楽園に話を移す前にもう一つ。永忠の社倉米について簡単に説明したい。なにせ彼の事業の多くが、この社倉米を財源にしたと考えられているからだ。

さて、岡山藩の年貢は他藩と比べて高いとされていた。池田家は姫路四二万石時代の家臣全員を、岡山三二万石に移っても召し抱えていたからだ。当然のごとく、慢性的な赤字となり、領民たちは高い年貢を払うために高利の借金をして、苦しんだ。

そこで永忠が考えたのが、彼自身が管理する社倉米という制度だった。まず、財源をつくるため、光政の長女が嫁いだ際の持参金銀千貫目を借り出した。ちなみに銀千貫目は米だと二万石にあたり、小大名なみの石高に相当する。これを年利二割で領民に貸付け、数年後には元金を長女に返済して、残った石高は二万五千石あまり。これを社倉米の財源として、低利もしくは無利子で領民に貸し、高利の借金から救うと共に、実質的な減税効果を狙ったものだった。

しかし、延宝五（一六七七）年に社倉米の本格的な運用が始まると、永忠の意に反して藩から流用を要求されることが多くなった。当時の永忠は前述したように光政によって政治の中枢から遠ざけられていたので、口出しすることは出来なかった。

そこで天和二（一六八二）年、綱政に見出された永忠が郡代となったおり、それまで領民に施していた「お救い米」の半分である約七千六百石と、藩士が殿様に差し出す「御家中御役米」二千百八十石を社倉米に毎年繰り込んで財源を増やすこととした。こうして農民救済だけではなく、藩に対して融資できるようになり、ここ後楽園の造園をはじめとする数々の事業が実現することとなる。

津田永忠遺績碑

［交通］JR岡山駅から徒歩約30分　岡山後楽園内